

06 子どもを育むもう一つの家（子ども）

皆さん、いかがお過ごしですか。福岡市がお送りする「こころのオルゴール」の時間です。今日は私、副島淳がお届けします。タイトルは「子どもを育むもう一つの家」です。

こども家庭庁では、保護者の仕事や入院、疲労などの事情で子育てが難しいときに、1週間まで子どもを預けられる「子どもショートステイ」という事業を進めています。

福岡市では、すべての校区に里親を置くよう取り組んでおり、預け先を施設だけではなく里親家庭にも広げてきました。2019年から5年間で、里親は100世帯ほど増えています。預け先が校区内であれば、いつも通り学校に通うことができるので、子どもも親も安心ではないでしょうか。利用するときは区役所で申し込み、調整機関を通して里親が紹介されます。利用者は年々増えており、2024年度は延べ1000件でした。

調整機関のひとつ、「福岡市里親支援センターブルームウエル」では、保護者と里親家庭のマッチングや、里親家庭への送迎などを担っています。センター長の高橋幸子さんは、「利用する理由の一番は育児疲れです。一人で子育ても家事も抱えている保護者が多く、子どもと少し離れて自分の時間をつくることで元気を取り戻しています」と話します。

25 利用者はひとり親世帯が7割近くを占め、経済的に苦しい家庭もあり、病気や障がいのある保護者もいます。子育てに不安のある保護者にとつて、里親ショートステイは命綱のような存在です。高橋さんは言います。

30 「皆さん子どもを大事に考えていて、一生懸命に育てています。一緒に暮らしつづけていきたいからこそ、支援を必要としているのだと思います。」

35 里親からは、「大変な思いをしている保護者の役に立ちたい」「子どもの成長と一緒に見られるのが楽しみ」という声が多く寄せられています。

40 里親家庭で子どもたちは温かく迎えられ、里親の子どもと一緒に遊んだり、みんなでご飯を食べたりして過ごします。近くの親戚の家に泊まりに行くような感覚で、何度も同じ里親を利用することもあります。「楽しかった」と帰つてくる子どもを見て、保護者も笑顔になっています。

45 「身近な地域で支えてくれる里親さんを、もつと増やしていきたい」と言う高橋さん。近くに頼れる場所があれば親も子も孤立せず、安心して暮らしていけるのではないでしょうが。